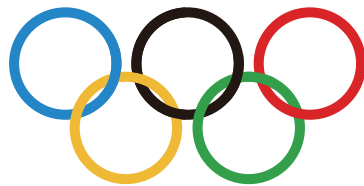


オリンピック観戦で 思う事



パリ五輪のテレビ放送やニュースで、選手たちの歓喜の表情や声、悔し涙、ここに至るまでの厳しい練習や怪我、体調管理、試合当日に焦点を合わせた自己コントロールなど、見る側もその選手のサポーターのような気持ちで見守る日々です。

心に残っているのは、スケートボード 男子ストリートで金メダルの堀米雄斗選手と、卓球女子シングルス銅メダルの早田ひな選手です。

堀米優斗選手は東京五輪から2大会連続の金メダル獲得です。

ストリートは、階段やレールなどが設置されたコースで、45秒の間に何回も技を繰り出す「ラン」を2回、一発の大技で勝負する「ベストトリック」を5回行なったうえで、得点が高かった「ラン」と「ベストトリック」2つを合わせた、3つの合計点で順位が決まります。

決勝の前半「ラン」で、堀米選手は4位でした。後半の「ベストトリック」では、1回目の演技の後3回続けて失敗し、あとが無い状況。最後の5回目、270度回転してボードの後ろ部分をレールに滑らせる起死回生の大技を成功させ、今大会の最高得点となる97.08を叩き出し、逆転で2大会連続の金メダルを獲得しました。2位との差は、わずか0.1点でした。

インタビューで「ここまで来るのに本当に諦めかけたこともあった。予選シリーズの第1戦が終わった後に、オリンピックに行けるかもわからない状況だったなかで、1%の可能性を最後まで信じてやったことが実ったのですごく嬉しい」

また、ベストトリックの5回目で97点台を叩き出し大逆転した場面については「音楽をかけないで(イヤホンは付けていたが)、自分に集中できるようにして、練習してきたことを出そうと思った。自分だけではなく、家族やファンの応援がカギになった。逆転を決められて本当に嬉しい」と。

堀米選手を子供の頃から見続け、堀米選手が高校卒業後アメリカに渡る際のサポートもしてきた、日本代表の早川コーチは「あのトリックは死ぬほど練習していたので、絶対決められると思っていたし、成功したら絶対いけると思っていた」。また東京五輪からの3年間の堀米選手の成長については「スケーターとしてよりも人として強くなった。僕のなかでは人類最強に近づいていると思っているし、世の中のスケーターのイメージを進化させてくれたと思う」と。

堀米選手のお父様は次のように言っておられます。「みなさん優斗に対してあまり苦労していないイメージを持たれる方も多いけど、僕からすれば何度も潰されている。頂点まで行って突き落とされて、また挑戦して強くなって。だからどんなに有名になってもあいつは雑草。下町の雑草ですよ。」

心の距離が一番近い方だから
こそその言葉でしょうか。



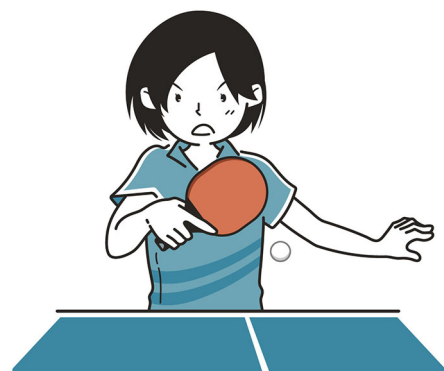
文章にすると長くなってしましますが、あの最後の「ベストトリック」を決めた瞬間は数秒で、そこに「この3年間は地獄のようだった」と語る堀米選手のすべてが凝縮され、報われた一瞬だったのだと、こちらもゾーンときて何度も動画を再生しました。

卓球女子シングルスで銅メダルをとった早田ひな選手は、試合中に利き腕の左腕を負傷しお風呂にも一人で入れない、ドライヤーも自分ではできず、テーピングを巻き、3位決定戦の試合開始5分前までは20%か30%の力しか出せない状況でした。試合直前に痛み止めの注射を打ってもらい、「もしかしたらいけるかもという感覚まで戻ってきたので、自分を信じて戦うしかなかったです」と話していました。決死の覚悟で3位決定戦に臨み、見事勝利しました。

試合後に早田選手は「神様にこんなタイミングで意地悪されるとは思っていなくて…」と話し、更に「日本の皆さんが本当に最後まで支えてくださって、私がプレーできるところまで持ってきてくれたので、どんな結果になっても最後までやり続ける。そして銅メダルを皆さんに見せられたらいいと思って頑張りました。」と。

二人とも20代前半の若者ですが、厳しい戦いとそこに至る険しい道のりを乗り越えて手にしたオリンピックのメダルは何物にもかえられないものだと思います。

また彼らが経験した「地獄のような日々」「神様の意地悪」は、今後の人生において貴重な経験となり生きてくると思います。



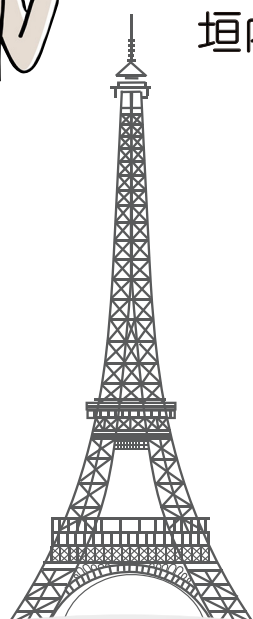
もちろん他の選手たちも、それぞれにドラマがあり、勝利を喜び、惜敗を涙する。そしてこの瞬間をみて私たちも感動し声援を送る。最近ではSNSを通じて選手たちへの誹謗中傷も多いと言われ残念ですが。

このオリンピック選手たちのように明確な目標を持ち、そこに向かってたゆまぬ努力、果敢な挑戦をし、時には挫折もしながら頂点を目指していく、心の強さを持って生きていけるのは幸せなことだと思います。

私たち企業に勤める者も、現状に満足することなく、仕事の改善や新たな提案、新たな挑戦をしながら自分を高めていき、会社も自分も成長するように日々を過ごしたいと思う夏のオリンピック観戦でした。



垣内イスズ



France